

# てりはのいばら

昨年、谷崎潤一郎記念館で行われた写真展。谷崎潤一郎の『細雪』の蒔岡四姉妹を、須藤氏一人で演じ分け撮影しています。旧家の誇りを体現する長女鶴子、情感豊かな次女幸子、内気で芯の強い三女雪子、行動的な現代っ子の四女妙子…。谷崎が描いた四様の美しさが、現代の視点で再解釈されています。



## 長女・鶴子

—姉と云う人は、早くから母の代りに父や妹たちの面倒を見た人で、父が亡くなり、妹たちがようよう成人する頃には、既に婿を迎えて子持ちになってい、夫と共に傾きかけた家運の挽回に努めると云う風な廻り合せになったりして、四人の姉妹のうちで一番苦勞をしているけれども、又或る意味では、一番旧時代の教育を受けているだけに、昔の箱入娘の純な氣質を今もそのまま持っているところがあった。—

谷崎潤一郎『細雪』上巻より

## 次女・幸子

—亡くなった父親の陽気で派手な性質を誰よりも濃く受け継いでいる彼女は、家の中の淋しいことが大嫌いで、いつも賑やかに若やいで暮らして行きたかったからであった。—

谷崎潤一郎『細雪』中巻より



## 四女・妙子

—一人だけ毛色の変った、活発で進取的で、何でも思うことを傍若無人にやっつてのける近代娘である。と云う風に見、時には憎らしくさえることがあるのだけれども、此の舞姿を見ていると、矢張妙子にも昔の日本娘らしいしとやかさがあることが分って、今迄とは違った意味で可愛らしくもおしくもなってきたのである。—

谷崎潤一郎『細雪』中巻より



## 三女・雪子

—日本趣味の勝った女であるから、刺戟の少い田舎の町で安穩に暮らして行くのには適しているし、定めし本人にも異存はあるまいと極めてかかったのが、案に相違したのであったが、内気で、含羞(はにかみ)屋で、人前では満足に口利けない雪子にも、見かけに依らない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではない…。—

谷崎潤一郎『細雪』上巻より

## 芦屋と谷崎潤一郎

### 芦屋と『細雪』

文豪・谷崎潤一郎が初めて芦屋に住んだのは、昭和9年、宮川町(現・富田碎花旧居)でした。昭和10年に森田松子と3度目の結婚。松子夫人と姉妹たちの生活を題材にした大作『細雪』を執筆し続け、戦後その全編を発表しました。



作品中には、昭和13年の阪神大水害の迫力ある描写や、阪急芦屋川駅・国道2号線・業平橋などが、優雅な四姉妹の生活の舞台として描かれています。

そのほか芦屋にちなんだ小説は、「まんじ」や「猫と庄造と二人のをんな」などがあります。



### 『細雪』文学碑

昭和61年谷崎潤一郎生誕100年を記念し東芦屋町に建てられ、前面には松子夫人による「細雪」の二文字が刻まれています。



### 谷崎潤一郎記念館

昭和63年に開館し、谷崎愛用の机・硯・筆・美術品資料を保存・公開しています。館内では、谷崎文学の朗読会や文学講座・講演会などが開催されています。(詳細は9面参照)

